

# 蜻蛉から源氏へ — その一 —

宮田光

道綱母は蜻蛉日記上巻末で

かくとし月はつもれど、思ふやうにもあらぬみをしなげくば、  
こゑあらたまるもよろこほしからず。猶ものはかなきをおもへ  
ば、あるかなきかの心ちする、かげろふのにきといふべし。(傍  
点筆者)

とみずからの「日記」を名づけている。その引歌として古来あげら  
れているものは

○あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる世  
なれば (後撰集 雑二)

○世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞあ  
りける (後撰集 雑四)

○世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそあり  
けれ (古今六帖 第一)

○かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとも思はざら  
なむ (宇津保物語 俊蔭)

などである。「かげろふのあるかなきか」という表現が歌語的常套

句であるにせよ、「かげろふ」が陽炎のことか蜉蝣のことか決定で  
きないにせよ、奥入蜻蛉巻にひく

たとへてもはかなき物はかけろふのあるかなきかのようにこそあ  
りける

の歌のごとく「かげろふ」によってあるはかない存在が象徴されて  
いることは間違いない。そしてそのはかなきが殆どの場合「世」  
「世の中」に関連していることも事実である。自己の生活記録を  
「かげろふのにき」と名づけた道綱母の意識の中には「世」「世の  
中」に対する一定の姿勢があったと考えるべきであろう。

蜻蛉日記の作者が「日記」をどう考えていたかを知るには、

1 人にもあらぬみのうへまでかき日記して、めづらしきさまにも  
ありなん、天下の人のしなたかきやとはんためしにもせよか  
し、とおぼゆるも (序)

2 (安和変ニツイテ)みのうへをのみする日きにはいるまじきこ  
となれども、かなしとおもひいりしも、たれならねばしるしおく

なり。

(中、安和二年三月)

3 (夢ノ話ノアト) これもあしよしもしらねど、かくしるしおくやうは、かゝる身のはてをみきかん人、夢をも仏をもちゐるべしや、もちゐるまじきやとさだめよとなり。(天禄二年四月)

の三例が適當であろう。ここには

1 自分の身の上、自分の思いをありのまゝに書くのであって、他人のことを書くものではない

2 自分の身の上を書くのは、他の人に参考にしてもらうためである。

という考えが含まれている。男性の日次の記録、とくに有職故実の記録としての日記と大きく食い違う点である。蜻蛉日記の作者にとって「品高き」ということがどういう意味を持っていたのか。自分の「人にもあらぬ」身の上は「天下の人」に知ってもらうべき価値があったのである。

上巻序文だけとりあげても、「いとものはかなく、とにもかくにもつかで」とはどんな状態で「世に経る」ことなのか、「本朝第一美人三人内也」と尊卑分脈にも記されている彼女に「かたちとても人にも似ず」「こゝろだましひもあるにもあらで」「もののえう(やうカ)にもあらである」と書かせたものは何であったのかという疑問が当然出されるであろうし、冒頭の「かくありし時すぎて」の「かく」は、これらすべての要素の原因となるべきものであった。

上巻末で「思ふやうにもあらぬみ」「ものはかなき」といっているのもそれまでの生活全般を総括した語とあってよい。そのような表

現で総括されるべき道綱母の生活は一体どんなものであったのか。

「身の上をのみする」とことわっている彼女の日記では「身」「身の上」はどう意識され、「世」「世の中」はどう意識されていたのか。蜻蛉日記の中で「身」は七六例、「世」は三七例、「世の中」は二六例用いられている。(解釈上異説のありうる例と本文に疑いのある例は除く)「世」はいわゆる世間一般をさす場合が圧倒的に多く(世―二三例、世の中―二一例)、次いで「男女の仲」をさす例が多い(世―六例、世の中―四例)。道綱母の意識がうかがえる用例のみをぬき出してみると左記の如くである。(傍点筆者)

1 九月になりて、「世の中をかしからん、ものへまうでせばや、かうはかなきみのうへも申さむ」などさだめて

(上、康保三年九月)

2 かくとし月はつもれど、思ふやうにもあらぬみをしなげば、

こゑあらたまるもよろこばしからず、(上、安和元年十二月)

3 (源高明ヲ) つひにたづねいで、ながしたてまつるときくに、あいなしと思ふまでいみじうかなしく、心もとなきみだに、かくおもひしりたる人は、袖をぬらさぬといふたぐひなし

(中、安和二年三月)

4 よからずはとのみおもふみなれば、つゆばかりをしにはあらぬを、たゞこのひとりある人いかにせんとばかりおもひつづくるにぞ

(中、安和二年閏五月)

5 しも月に、ゆきはいとふかくつもりて、いかなるにかありけん、わりなく身こゝろうく、人つらく、かなしくおぼゆるひあ

り。(略)

ふる雪につもるとしをばよそへつゝきえむごもなき身をぞうらむる

6 身のあるやうを仏に申すにも、なみだにむせぶとすていひもやられず。(中、天禄元年七月)

7 その心ばへ、「たゞきはめてさいはひなかりける身なり、(略)とくしなせたまひて、ぼだいなへたまへ」とぞおこなふまゝに

8 世中にある我身かはわびぬればさらにあやめもしられざりけり(中、天禄二年五月)

9 ひた心になくもなりつべき身を、そこ(道綱)にさはりていまゝであるを(中、天禄二年六月)

10 かくてなかくゝなるみのびなきにつゝみて(下、天禄三年一月)

11 「みの心ぼそさに、人のすてたることなんとりたる」などものしおきたれば(下、天禄三年二月)

12 かくのみうくおぼゆるみなれば、このいのちをゆめ許をしからずおぼゆる(下、天禄三年三月)

13 「いまは、かぎりにおもひはてにたるみをば、ほとけもいかゞし給はん、たゞいまは、この大夫を『人々しくてあらせ給へ』

など許を申給へ」

(下、天禄三年五月)

14 たれならむとみれば、御せんどもの中に、れいみゆる人などあり。さなりけりとおもひてみるにも、まして我みいとはしき心ち

す。

(下、天禄四年三月)

15 いまさらにいかなることまかなつくべきすさめぬくさとのがれに、しみを(下、天延二年四月)

16 かくありしときすぎて、世中にいとものはかなく、ともかくにもつかで、よにふる人ありけり。(上、序)

17 わがいへとおぼしき所は、ことになんあんめれば、いとおもはずにのみぞよはありける(上、康保元年秋)

18 かくて、人にくからぬさまにて、とをといひてひとつふたつのはあまりにけり。されどあけくれ世中の人のやうならぬをなげきつゝ、つきせずすぐすなりけり。それもことわり、みのあるやうは、よるとても、人のみえおこたるときは、ひとずくなに心

ぼそう、いまはひとりをたのむたのもし人は、この十よねんのほどあがたありきにのみあり。(上、康保三年五月七月)

19 かくてかぞふれば、よるみぬことは三十よ日ひるみぬことは四十よ日になりけり、いとにはかにあやしといはゞおろかなり。心もゆかぬよとはいひながら、まだいとかゝるめはみざりつれば

20 すべて世にふるることかひなくあぢきなき心ちいとすることなり(中、天禄元年六月)

(中、天禄二年九月)

ただ一人のたのもし人である父は県歩きばかりしていたし、その父の代りとなるべき夫には「三十日三十夜はわがもとに」(中、安和二年一月)という願いは通じなかった。「自分の期待とは全くちがっていた、世間なみですらない、きわめて不幸な、はかない」身

を、「まへわたり」のない世界もあるかと、(天禄二年六月)山寺へ籠って仏に頼ってみたこともあったものゝ、時がたつにつれて、すっかりあきらめてしまい、「命も惜しくない、たゞ我が子の幸せのみを」と願い、そのような自分をしみ／＼といとおしく見る筆者の眼が、そこにはある。その時代ではそれほど特殊とも思われない道綱母の生活形態ではあるが、彼女の中には「世」「世の中」のあるべき姿とはかけ離れた自分の生活が意識されていた。それが日記をかく事へと彼女をかりたてたといえる。

女もじで書いた最初の日記としての土佐日記には、随所に亡児を恋うる思いがみられるが、それは「世」「世の中」というものに対する一定の姿勢としては出ていない。しいていえば

○いまみてぞみをばしりぬるすみのえのまつよりさきにわれはへにけり

○きみこひてよをふるやどのむめのはなむかしのかにぞなほにはひける

などにみえる、自然と人間の生とを対比する一つの姿勢であるが、これは漢詩文でも常套的なものであり、貫之独自のものとは考えられない。

自分の生活のあるべき姿と現実との食い違いを見つめて、創作する原動力としていったのは道綱母が最初といえよう。

蜻蛉日記が書かれてからおよそ三十年たって紫式部日記が書かれた。紫式部も道綱母と同じく、安易に生きるには鋭どすぎる感受性

を持っていた。道綱母のごとく突然寺に籠ったり、養女を探すというように行動に表わさなかったかわりに、彼女の人生はすべて書くことにつながっていたと考えられる。

彼女の「身」「世」「世の中」に対する意識状態をあらわす用例を紫式部日記からひろってみると、左記の如くである。(傍点筆者・頁数は至文堂刊池田亀鑑者「紫式部日記」による。)

1、女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ (一一五頁)

2、なぞや、まいて、思ふことの少しもなめなる身ならましかば、すすずしくもてなし若やぎて常なき世をも過ぐしてまし (一五四頁)

3、水鳥を水の上とやよそに見む我れも浮きたる世を過ぐしつかれもさこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど身はいと苦しかなりと思ひよそへらる (一五四頁)

4、はかなき物語などにつけてうち語らふ人同じ心なるはあはれに書き交し、少しけ遠きたよりどもを尋ねてもいひけるを、たゞこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人数とは思はずながら、さしあたりて、恥づかしいみじと思ひ知る方ばかり、のがれたりしを、さも残せる事なく、思ひ知る身の憂さかな。 (一八二頁)

5、試みに、物語をとりて見れども、見しやうにも覚えすあさましく、あはれなりし人のかたらひしあたりも、我れをいかにおもなく、心浅き者と思ひ落すらむと、推し量るに、それさへいとほ

づかしくて、えおとづれやらす (一八三頁)

6、(五節ヲ見テ)されど、目に見ずあさましきものは人の心なり、されば今より後の面なさは、ただ馴れに馴れすぎ、ひたおもてならむもやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひ続けられ、あるまじき事にさへ思ひかかりて、ゆゆしく覚ゆれば (一九五頁)

7、かくかたがたにつけて、一ふしの思ひいで、取るべき事なく過ぐし侍りぬる人の、殊に行末のたのみもなきこそ、慰め思ふ方だに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。 (二二四頁)

8、御有様などのいとさらなることなれど、憂き世の慰には、かかる御前をこそ尋ね参るべかりけれと、現心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやしき。 (一一二頁)

9、すべてはかなき事にふれても、あらぬ世に来たる心地ぞ、ここにてもうちまさり、ものあはれなりける。 (一八三頁)

10、大納言の君の、夜夜は御前にいと近うふし給ひつつ、物語し給ひしけはひの恋しきもなほ世にしたがひぬる心か。 (一八四頁)

11、年暮れて我が世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな (二〇四頁)

12、(樂府進講ノコトニツイテ)知りたらばいかに誹り侍らむものと、すべて世の中、ことわざ繁く憂きものに侍りけり (二三二頁)

13、いかにも今は、言忌し侍らじ、人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経ならひ侍らむ。世の厭はしき事は、

すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らす。 (二三二頁)

14、心深き人真似のやうに侍れど、今はただ、かかる方の事をぞ思ひ給ふる。それ罪深き人は、また必ずしもかなひ侍らじ。前の世知らるることのみ多う侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。 (二三二頁)

盛りを過ぎた自分は(1)自然に周囲にとけこむことができないう。もう少し人並の考え方のできる自分だったら——(2・3)他人が環境になじんで次第に臆面なくなるのを見るにつけても自分のことがかえりみられる。自分もそうならないか——現にそうなっているのではないか。(6・8)出仕することによって、まのあたり「恥づかし」「いみじ」という思いを思い知らされた(4)とはいうもの、里へ下ったところで、そこももう「あらぬ世」の心地がして安住の地ではなかった。(5・9・10)周囲のものすべて「世」との違和感を拭い切れなかった彼女は、最後に宗教への傾斜を深めていくのだが、(13・14)いわゆる「消息文」の最後の部分にあるように

御文にえ書き続け侍らぬ事を、よきもあしきも世にあること、身の上のうれへにても、残らず聞えさせおかまほしう侍るぞかし。(略)されどづれづれにおはしますらむ、又つれづれの心を御覽せよ。またおぼさむことのかう益なしごと、多からずとも書かせ給へ。見給へむ。(略)かく世の人ごとのうへを思ひて、はてにとちめ侍れば、身を思ひすてぬ心の、さも深う侍るべ

きかな。何せむとにか侍らむ。

(二三三頁)

と、書くこと、読むことへの、他の人・わが身の上への執着心を断ち切ることはできない。執着心は形をかえた愛情と考えてよい。違和感に悩まされつゝ、世の中への関心・愛情を捨てきれない彼女の人生は、創作することによってしか満たされなかったはずである。

紫式部日記に続いて女流日記としてあげられる和泉式部日記・更級日記にも「世」に対するこのような違和感はみられない。和泉式部日記に用いられている「憂き世」「憂き世の中」「はかなき世の中」は、少くとも文章そのものの中では、一般的・概念的な厭世観をあらわすにとどまっている。更級日記の作者の主に見ているのはむしろ夢などを通じて啓示された「前世」あるいは「後世」であって、「現実のきびしさ」ではない。彼女が「みつのはままつ」「ねざめ」の作者であるにせよ、ないにせよ、更級日記の中には、現実を生きることにより作品をつむぎ出していく姿勢が感じられないのは事実である。あるとすれば、それは、思いにまかせぬ現実から逃避せんがために物語の世界に身を沈める、少女時代の延長としての姿勢であろう。